

つ
な
が
り

ま
ち
と

sun⁰¹

茨城県
東茨城郡
茨城町

Spring 2017



Sun

茨城県
東茨城郡
茨城町

Spring 2017

Contents 目次

- 03 特集 | まちで暮らす人
まちを想う人
- 11 サクラが咲かせた人の縁
- 大戸のサクラと齋藤家の物語 -
- 13 連載 | マチのケシキ
- 14 編集室から



Cover
写真 / アラタケンジ モデル / 松浦陽菜
“緑のアーチを、一人の女性が通り抜け
その後ろを追う様に、春の足音が静かに広がる”
モデルになっていただいた松浦さん、
撮影を快諾していただいたBACKYARDさん
ありがとうございました！

東風が 里山を駆け抜け
地に芽吹く 緑が目覚める
雄大な湖を育む 滔滔とした流れと
古来から続く 人の営み
太古の昔から ゆるやかに照らす
陽の光は
この大地に いぶくすべてを
優しく そして静かに包みます
Sun は
茨城町と ゆるやかにつながる
いくつもの縁を
人々の暮らしや情景と共に
綴り 伝えて行きます



特集

まちで暮らす人 まちを想う人

*Feeling &
Thinking
Iharaki*

この場所で生まれ育ち、共に時を刻む。

ここから離れ、思いのままに生きる。

茨城町と縁がある方に、まちとの関わりと

これからの在り方を伺いました。

第一回目は、町内出身のお二人。

イメージを形にする人たちの、まちの捉え方とは。

写真：アラタケンジ

文：米村優子

始めることに適した土壌

まちで暮らす人
D代表 石川聖太



石川さんは1979年茨城町小鶴生まれ。現在同町大戸在住。茨城県内のデザイン会社数社を経て、2007年に上京、制作プロダクションにて広告制作・キャンペーン施策に携わる。2014年茨城町に戻り、翌15年にデザイン事務所「D」を設立。県内外の案件を始め、いば3ふるさとサポーターズクラブのアートディレクションを担当しています。

不思議に映った小鶴の街

私が幼少期を過ごしたのは小鶴の商店街。かつて両親が商売を営んでいた店舗に住んでいました。少年時代の様子は割と普通だったかな？住まいの裏手にあるミコ（用水路）で魚やザリガニを捕ったり、学校が終わると近所の友達と駄菓子屋の「こどもや」に行つてゲームをしたりと。当時の小鶴には人が沢山いて、自宅にも色々な人々が入り込んでいました。会うと必ずミルクキャラメルと千円をくれるおじさん、籠を担いで行商に来ては、勝手にお茶を飲んで帰つて行くおばあさん、地域の風習なのか、突然家に獅子舞が来て頭を噛まれたり、棒に付いた餅を持って家々を廻る大人たちもいました。近くに住んでいた祖母からも、曾祖父が山で狸に化かされた話をよく聞かされたし、通ると必ず犬に追いかけられる路地もありました。今になって振り返ると、小鶴の街には独特の文化があったと思いますし、何より、子供と大人の距離感も近く、分け隔てがあまり無かったのだと思います。それらが幼い私には不思議に映っていたのかもしれない。

その後、地区内で一度引っ越しをするのですが、新居では兄と部屋が一緒で、兄が音楽好きだった事もあり、色々な音楽が鳴っていました。中学になると、何となく入った柔道部でなぜかレスリングをやらされ、気がついたら全国大会で五位になっていました。しかしその頃すでにファッションや音楽に興味を持ち始めていたので、レスリングはそれっきり。デザインを初めて意識したものもその

頃かな。美術の教科書に、永井一正さん達が60年代に日本宣伝美術会で共同提案した日の丸のコンセプトシートが掲載されていて、そこに書かれていた「デザインって言葉がなんとなく頭に残ったんです。」

高校では、それなりに勉強はしていましたが、基本スケートボードばかりしていました。電子音楽にもハマっていたので、都内のクラブにもよく通っていました。そんな環境にいたので、パーティーのフライヤーやレコードジャケットのデザインに自然と惹かれていきました。



地元を俯瞰で見る

専門学校を卒業後、茨城県内の看板屋やデザイン会社で働いていました。チラシ作成の千本ノックをひたすら受け返す毎日。そんなこんなで27歳になり、気付くと仕事もプライベートも停滞し始めていて。これからの身の振り方を考え、一度きちんとデザインの仕事を学びに、都内に出てみようと思いました。勢いで応募した制作会社の書類審査が通り、面接の時に特技は何だと聞かれ、レスリング全国五位の話をしたんです。すると「君、おもしろいからウチにきたら?」と、その場で道が開けてまして(笑)。入社後すぐに広告代理店の制作部へ出向を命じられ、自動車メーカー、銀行、製薬会社、ハウスメーカーなど企業のキャンペーン施策やノベルティー、カタログ作成などを担当していました。それなりに忙しかったですが、予算やスケジュール管理、制作に関わるディレクションの仕方に至るまで、質の高い仕事に触れられたのはとても大きかったと思います。妻も同郷なので、年数回は地元に戻っていましたが、ふと車窓から見える山の稜線や、何気ない小さな森が気持ち良く思えたんです。都内には建物が多いので、見上げる空は当然狭くなるのですが、茨城町は視界を遮る物がほぼ無く、空が当たり前に広く感じれて。町から離れた事で、自分の中で比較対照ができたのかもしれない。今までは当たり前前だった光景を、コンテツとでもいうか、ちよつと俯瞰して見られるようになったんです。何もない所と思っていたけれども、実はそうでもないぞと。少しずつ気付けたのかもしれない。

ゆるく始められる

上京して8年程経った頃、次女が生まれたタイミングで、父が突然実家近くの土地を購入したんです。当初そこにはガレージを建てる予定でしたが、その後話が二転三転し、実家をリフォームするから一緒に住め、購入した土地には「事務所でも作れば?」という事になりました。町から都内までは正直通えない距離

じゃない。独立するのも目標の一つだったし、「まあ、いいか。なんとかなるだろう」と。そんな訳で、35歳の時に茨城町へUターンし、その後「U」としての活動を始めました。いばらに聞かれる事になったのは、改めて町の事を考える良いきっかけになりました。町に戻って来てまず感じたのは、ここは「何かを始めるにはいい場所」だということでしょうか。どこの町でも同じかもしれませんが、あたりに森があり、水場があり、商店街もある。その当たり前が心地良いんです。そして、個々が様々な生き方をしている、排他的にならず、受け入れる土壌があると感じます。生活の質も以前より豊かになりました。食べ物が美味しいのはもちろん、私も妻も基本インドア派なのですが、早起きをして家族で朝ふらつと近くの森へ出掛け朝食を取ったり、湖畔でタープを張って寝そべってみたりと、気軽にアウトドアを楽しむという、ちよつとしたライフスタイルの変化も生まれました。本気のキャンプではなく、気軽にデイキャンプに来るのもいいと思いますし、双眼鏡を持たないバードウォッチングや、ただただ森林浴するのもいい。都内にもすぐに出れるし、ふらつと暮らし始めてみるのもいい。力を入れずにゆるく楽しむ土地としては、とても適している場所なのではないでしょうか。

私自身、Uターン組ではありますが、町で仕事をするようになって、出会う人の幅が増えましたし、密な関係性を築く事も増えてきました。地域の人との対話や繋がりが生まれ、それらを少しずつ形にしていきたいなと思います。●



www.i-dinc.com

Making
a Gentle feelings

笑顔になれる
つながりを創る

まちを想う人

羊毛フェルト作家 ホシカワリエフ

ホシカワさんは1970年宮城県仙台市生まれ。現在東京都在住。75年頃に旧神栖町（現神栖市）から茨城町に引っ越して来ました。短大進学を機に上京、音楽事務所のスタッフとして活躍した後、都内の食品メーカーに派遣社員として勤務。2006年に羊毛フェルトと出会い、イベントやブログ等にて作品を次々と発表。仕事の傍ら、羊毛フェルト作家 Yoko として活動中です。

創りたいから、つくる

幼稚園生の頃、旧美野里町（現小美玉市）で仕事を始めた父の関係で、茨城町民になりました。新居は当時の新興住宅地にあり、周辺の人々は親と同世代。ここに決めた理由はわからないのですが、何か気に入ったんでしょうね。そして私はリズムの園々と呼ばれた幼稚園に入る事となり、そこで音楽と出会いました。それからピアノを習い始め、中学はブラスバンド、高校ではバンド活動と、ずっと音楽がそばにある生活を送っていました。

高校に通っていた時、路線バスの本数の少なさにいつも不満を持っていた。[水戸や石岡に住む友達にふらつと街へ出かけているのに:]「なんて住みにくい所なんだろう...」と当時は思っていました。その反動か、東京で暮らし始めた時あまりの自由さに「もう町に帰る事はないな」と正直思いました。だけど、「いずれ親がいる町に帰る事になるのかな...」とも心のどこかで思っていました。

在学中に音楽関係のスタッフをやっていたので、そのまま音楽業界に入りました。華やかなイメージとは裏腹に、給料は激安で激務。だけどバンドメンバーや厳しいけれども愛がある先輩たちに囲まれて、辛くても楽しく刺激的な毎日でした。しかし、30代に差し掛かると、徐々に気力と体力が続かなくなり、音楽業界の仕事には終止符を打つ事になりましたが、表現の現場を間近に観られた体験は、今の仕事や創作活動に多少なりとも活かされているのかな、と思います。

羊毛フェルトを始めたきっかけは、たまたま読んだ新聞にワークショップの案内が載っていて、友達を誘ってふらつと行ってみたんです。母が長年やっていたパッチワークのような細かい作業は正直苦手と思っていたけど、ものづくりは好きだったから。いざやってみると、適当に丸めてニードルを刺すだけで形ができるのが面白くてハマっちゃったんです。そして2010年頃かな、ブログで紹介したウェルカムドールが話題になり、書籍やウェブメディアに掲載していただく機会が徐々に増えて、そこから世界が広がっていききました。都内百貨店での企画展に声をかけていただいたり、ゆかりのある水戸や仙台での委託販売とイベント参加、そしてデザインを担当したダイソーさんの羊毛フェルトキット。国内だけでなく海外の店舗に置かれたのも嬉しかったです。私の作品は、動物や人をシンプルにデフォルメしたもの。だけど、どこか子ども向けではない雰囲気を感じさせたい。生み出すのはどれも世界にひとつしかない。だから、作品を手にした人が笑顔になり、永く大切にされるものをこれから創り続けたいと思います。

おいしい食べ物とやさしい人々

茨城町で暮らした年数より都内での生活が長いので、町の人々とは正直少し距離を感じていました。ですが実家に戻ると、同級生が子育てや仕事で忙しい中、わざわざ家の畑で作った野菜や手料理をもつて会いに来てくれるし、亡き父の会社の方も庭木の剪定を手伝ってくださる。そして、近所の方々も差し入れをしてくださったりするんですよ。母が他界したあと、「ふるさとの味はもう食べられないんだな...」と思っていました。けれども、地元友達や近所の方々のお陰で帰る度においしい手料理を頂けるんです。この前は実家の玄関に差し入れの太巻きがぶら下がっていました笑。きつと両親がこの地に根付いて、きちんと人付き合いをしていたからこそ、皆さん良くしてくださるのでしょうか、有り難いです、本当に。



茨城町は未だ交通の便はいまいちだけれども、食べ物がいしくて、やさしい人が多いと思います。町は育った所なので愛着があるけれど「戻ろうかな...」「今の仕事や生活を変えられるかな」と、まだ天秤のように心が揺れています。でも近頃はSNSを通じて町の人々との新たな出会いが生まれたり、おしゃれな店や場所を知る事ができ、とても嬉しくて。これから楽しそうな事が増えそうだなとワクワクしています。町のインスタグラムを見ると、「こんな素敵な景色が身近にあるのに、何で行った事なかったんだろう」と興味湧くような所ばかりで、「自分が町の事を知らないだけで、実は色々あるんじゃないかな」と感じられるようになりました。最近やつとペーパードライバーを卒業し、自分で動ける範囲が広がったので、実家から意外と近い涸沼とかに今度出かけてみたいです。そしていつか、町を通じておもしろい活動ができたらいなと思っています。🍁



サクラが 咲かせた 人の縁

—大戸のサクラと齋藤家の物語—

写真 | ヤラダケンジ 文 | 米村優子

「よう来たねえ」。

私の前で何千回、何万回と交わされた、ほつこりと包み込まれるような挨拶をするのは、齋藤家の人々。私「大戸のサクラ」を先祖代々守り継いでいる一族です。私が齋藤家にやって来たのは約千年前。ある日、一族の祖先である漢方医の崇源さんが涸沼川に草を取りに行くと、川を渡れずに立ち往生していた一団に遭遇。親切な彼は早速、川を越えやすい場所へと案内してあげました。その後、この一団が奥州討伐途中の八幡太郎義家（源義家）さん達だと知るやいなや、崇源さんはたいそう驚き、すぐさま武将たちを自宅に招いて、一族を上げてもてなしました。それらに感謝した義家さんはおそらく討伐途中で物資をあまり持ち合わせていなかったでしょう。齋藤家にお礼の

品として、川を渡る際、深さを測るために使った山桜の枝を差し出しました。

その枝こそがそう、私なのです。

それからというもの、私は齋藤家の家宝となり、「家が燃えても、家族とサクラは守れ」という家訓のもと、一族の愛情を一身に受けて、広い庭ですくすくと育ちました。四月中旬の満開の時期には、私の下には近所や地域の人々が集まり、連日お祭り騒ぎ。江戸時代には私の太い幹の上に乗ってお酒を酌み交わす方なんかもいたり、それはそれは愉快なひとときでした。やがて私は「源八桜」の愛称で親しまれる地域で有名な桜となり、水戸黄門でおなじみの徳川光圀公がお見えになられた事もありました。

永く生きていれば、色々な事があるもの。実は私、一度命の危機に瀕したことがあります。一九〇二年、私

に雷が落ち、体の一部が倒れ、その傷口から病害虫の被害に遭い「このまま枯れてしまうのかな」と覚悟もしました。そんな中、私の回復を信じ懸命に看病してくれたのは、やはり齋藤家の人々でした。幹の根元に観音様を祀ってくれ、天に祈りを捧げ、手厚く手をしてくれて……。そのお陰で、今があるのです。

一九三三年、私は国の天然記念物に指定され、全国からの客人が訪れるようになりました。いつの時代も齋藤家の人々は愛嬌たっぷりでお喋り上手な方ばかり。「サクラがたくさんの縁をつないでくれたと、どんな人も笑顔で迎え入れ、その一期一会を楽しんでいるようです。家運が変動した中でも、私を守り抜いてくれた齋藤家には、感謝以外の言葉が見つかりません。一族がこの地で生きる証、そして、人と人をつなぐ縁結びのサクラとして、今年も精一杯花を咲かせたいと思います。」



11,12ページで紹介した、大戸のサクラの物語。
その文中に登場する、今回取材にご協力いただいた齋藤家のみなさま。
手前は利子さん、重男さん・美奈子さん夫婦、
孫の裕樹さんと有紗さん。みなさん教育関係のお仕事をされていて、
お忙しい中お話を聞かせていただきました。
利子さんも90歳とは思えないお元気な方で、
桜の思い出をたくさん語っていただきました。
紙面の関係で載せられなかったエピソード、桜に対する想いなどを
後日WEBサイトで“大戸のサクラ物語 完全版”として公開致します。
お楽しみに!!

From Sun -編集室から-

Sun 第一号をお届けします。

今回は、茨城町の中と外の人、それぞれの立場で町との「つながり」についてどう感じているのかを焦点に特集を組みました。

町の思い出や風景が出てくるので、町の雰囲気、空気が少しは伝わったのかな、と思います。懐かしいなあ、そういえばこんな事あったなあ、
と思い返していただければ何よりです。私自身以前は、電車が無い、遠出しづらい、遊ぶ場所もないと、町の不自由な所ばかりが目につき、
茨城町を離れしばらく暮らしていました。が、いざ町を出てみると、都会の人混みに慣れる事ができず、すぐホームシックに。たまたま実家に
帰ると、のんびりできる場所がこんなにも多かったのかと気づき、その後、自分は地元の方があっているなと思い町へ戻ってきました。

そして今回、いば3の設立に携わり、町の良い所を自分に紹介できるかなと少し不安だったのですが、いざ調べ始めると、初めて知る事の
多いこと多いこと。隠れた町の史跡や沼沼湖畔の素晴らしい景色、昔からあるのに行った事がなかった美味しいお店など、新たな発見があり、
町を調べるのがとても楽しくなりました。みなさんも紙面を通じて、町を懐かしんだり、「近くまで来たから、寄ってみようかな」と思ったり、
町の新たな文化を見つけ「こんな所があったんだ!」と気付いたり、町を思う事が増え、茨城町を好きになってもらえたら嬉しいです。
[がっきー3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしていきます。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト www.town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2017年7月発行予定です。

Sun 第1号 春号 2017年4月1日発行

企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL: 029-240-7126
MAIL: iba3@town.ibaraki.ibaraki.jp

編集・アートディレクション・デザイン | i,D
取材・出筆 | 米村 優子 石川 聖太
写真 | アラタケンジ
イラスト | knittt
印刷・製本 | 光和印刷株式会社
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks
BACKYARD[表紙] 松浦陽菜さん[表紙] 斎藤大暉くん・星莉那ちゃん[特集]
石川聖来ちゃん・茉瑠ちゃん[特集]



“いば3”では
サポーターを
募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は、
いばらきまちが考えるあたらしくてゆるやかなつながりの場です。
まちとのつながりをみんなで共有し、
魅力・風景・楽しみ方を見つける活動を行います。
ご入会された方には、
素敵なサポーターズグッズセットをプレゼント。
ぜひご入会ください。

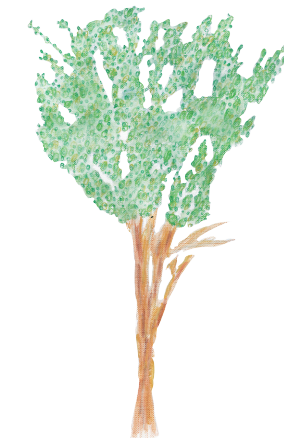
お申し込みはこちらから
www.town.ibaraki.lg.jp/iba3



QRコード



宮ヶ崎地区 鹿島神社前のケヤキ
町史にも記載があり、樹齢は500年以上。
きつと待ち合わせの場所に使われたり
したのだろう。



馬渡地区 個人宅に生える巨木
何かの記念で植えられたのか
家人達を見守るかのような威厳のある佇まい。



長岡地区 町営団地近くの空き地にある大きな木。
スギの木だろうか。
枝と幹のバランスがちょうどいい美しいフォルムは
絵本や映画のワンシーンに出てきそう。

マチの ケシキ

第1回 優しい大木たち
イラスト | knittt 文 | 石川聖太

仕事や入り用で町内を歩いていると、旧家の
庭先や道沿いに、ケヤキだろうか、やたらと大き
い木がある事に気付いた。それからというもの、
町内を歩く度に、まるで気になるお店を見つけ
たかのように、民家や名も無い野山、小学校の
校庭など、町の至る所で大きな木が目に入る。
古い神社にある鎮守の森はもちろん、お寺の
御神木と言った高尚な存在ではなく、もう少
し庶民的と言うのか、いわばで古い家具のよう
な雰囲気、ただただそこに佇んでいる。
「茨城町史」という、この土地の歴史を古く
から記録している本がある。先日この本に触れ
る機会があったのだが、各地域の頁にも必ず
「巨木」という項目があり、〇〇神社にカシ、どこ
ぞの軒先にケヤキ数本ゝ等の記載があった。
今より緑がずっと濃かったであろう時代に、この
本を編集した人が町内を歩いて話を伺った際に、
この木デカイな〜！うわっこちのもデカイ!!
こりや地域の目印になるぞ〜!!と思い、記録し
始めたのだろうか。始まりは木から落ちた小さ
などんぐりであったかもしれないし、何かの
記念に人の手で植えられた物かもしれない。時
が経つ中で徐々にそのきつかけ役割を忘れられ、
ただそこに住む人を優しく見守る存在になっ
て行つたと想像すると、なんかいいなと思っ
たりする。この町は、住所に茨城が三回ついて
少々クドいけど、いくつもの大きな優しさに包
まれているんだと思う。●

